

木器一点などであるが、木質を軟化させ、加工を容易にするために水中に貯蔵されていた可能性も指摘されている。下稗田遺跡からは他にも両用鍬・堅杵たてきね・小型臼・椀形木製品・鍬や石斧の柄・案・建築部材など一〇〇点を超える多種の木製品が出土している。未完成品の存在からみても、これらの木製品は一貫して集落内で生産されたものであろう。

京築地域では土器や石器以外にも他地域から搬入された遺物が発見されている。金属製品のうち銅製品については当地域ではまだ鑄型の発見例がなく、銅鏡や武器形銅製品の多くは他地域からの搬入品と考えられる(表2-8)。十双遺跡の後期後葉の第9号居住跡からは板状の銀製品が出土している。これは長さ五・三五センチ、幅一・〇五センチ、厚さ〇・一五センチの大きさで、銀九七・六%と極めて純度の高い製品である。弥生時代の銀製品は国内では非常に稀有なもので、佐賀県大和町惣座遺跡の指輪三点と北海道羅臼町植別川遺跡の飾り金具しかない。当遺跡の銀製品の産地は第13号住居跡から出土した漢式土器と同様に朝鮮半島の楽浪産と考えられている。安武深田遺跡からは分銅形土製品が出土している。前田山遺跡の貯蔵穴からは石製の剣把頭はしら飾が出土している。これは剣の柄の先端部につける装飾品であるが、その素材が黒色を呈する磁鉄鉱で、隕鉄の可能性があることで注目されている。その生産地は朝鮮半島や大陸に求めることができるであろう。分銅形土製品は中期中葉から後

期中葉にかけて岡山県を中心に山口県などに分布するもので、近隣では北九州市の北方きたがた遺跡やカキ遺跡で出土している。瀬戸内海沿岸地域との交流を示す資料である。

第四節 北部九州の弥生文化

北部九州は稲作農耕が最初に導入された地域であり、言い換えれば列島内で弥生時代が初めて産声を上げた地域である。その後も弥生時代を通じて大陸との交流の窓口となっており、新しい技術や道具がいち早く取り入れられた先進地であった。

本節では弥生時代における北部九州の特徴を、集落や墓地・道具などに焦点を当てながら概観していく。

集落の変遷

稲作農耕が開始された時期は北部九州では縄文時代晩期にさかのぼる。福岡市板付遺跡は御笠みかさ川の氾濫原にのびる舌状台地上に住居跡と貯蔵穴からなる集落と墓地が営まれ、水田は集落西側の氾濫原に広がる。縄文時代終末期に開始された集落は、弥生時代前期に入ると南北約一七メートル・東西約八二メートルの卵形の環濠に囲まれ、墓地は環濠の外側に営まれるようになる。水田跡からは人の足跡も発見されている。二丈町曲り田遺跡では水田より三〇メートルほど高い独立丘陵上に、縄文時代晩期の方形竪穴住居跡三〇軒と支石墓一基が発見されている。出土遺物には大陸系磨製石器群や鉄器・紡錘車が

ある。また、佐賀県の唐津市菜畑遺跡では小さな谷底平野に湿田タイプの水田が開発され、諸手鋏・えぶりなどの農耕具をはじめとする多数の木製品が出土している。これらの遺跡の調査成果から見て、北部九州における導入期の稲作農耕は水田のあり方・道具の種類など、すでに完成した形で移入されていたことが分かっている。

前期後半から各地域に拠点的な集落が出現するが、それらの集落は中期にかけてしだいに規模が大きくなり周囲に何重もの環濠をめぐらすようになる(図2-45参照)。佐賀県吉野ケ里遺跡は竪穴住居跡三五〇軒以上と甕棺墓などの埋葬施設約二五〇〇基が調査されているが、前期中ごろにすでに長径約二〇〇m・面積約四畝の環濠集落を形成している。中期後半になると集落の北側の墳丘墓を取り込んだ南北一帯以上に及ぶ外濠が掘られ、後期にはこの外濠の内側に新たに南北一五〇m・東西七〇m程度の内濠が掘削される。長崎県壱岐郡の原ノ辻遺跡も東西約四〇〇m・南北約九〇〇mをはかる巨大な環濠集落で、中国からの舶載品である戦国式銅剣・ガラス製トンボ玉・貨泉などが出土している。これら北部九州各地域の大規模な環濠集落は、『魏志倭人伝』に登場するクニの中心集落であったと考えられる。

筑紫野市隈・西小田遺跡群は環濠こそないが、北部九州でも屈指の規模を誇る拠点集落である。約五三畝の事業地内で弥生

時代を中心に一部古墳時代にも及ぶ時代の住居跡一一二〇軒・貯蔵穴一〇三五基・建物跡二三棟・甕棺墓一四五四基・土壙墓一九三基・木棺墓八九基・石棺墓一一基・石蓋土壙墓一〇基などが調査されている。北部九州では珍しい銅戈埋納遺構が発見



写真2-21 隈・西小田遺跡一括埋納銅戈(筑紫野市教育委員会所蔵)

され、中広形銅戈二三本が出土している（写真2―21）。

甘木市平塚川添遺跡では中期前半から古墳時代初頭にかけての拠点集落が調査され、竪穴住居跡二六〇軒・掘立柱建物跡一二一棟などが発掘されている。環濠は後期後半から終末に造られ、南北約二二〇メートル・東西約一二〇メートルの内濠の内側に中心集落があり、その周辺の七つの別区に小集落が形成され、さらに外側に環濠がめぐらされている。内濠内には首長の高殿たかどのか集団の倉庫と推定される大型の掘立柱建物跡が四棟並んで建てられていた。

墓地の変遷

縄文時代晩期末から弥生時代前期に、福岡県西部から長崎県の北部沿岸にみられる特徴的な埋葬施設に支石墓しせきぼがある。これは土壙墓や石棺墓・甕棺墓などの上に支石を置き、その上に大型の板状の上石を載せる墓である。支石墓は東北アジアに広くみられる墓制で、特に朝鮮半島では無文土器の時期に流行する。北部九州では長崎県鹿町町大野台支石墓群では四群七十数基を数える支石墓が確認されており、主体部は大部分が箱式石棺である。曲り田遺跡の支石墓では、楕円形の墓壙に火葬骨が葬られ、丹塗り磨研の小型壺が副葬されていた。前原市志登支石墓群（写真2―22）は一〇基の支石墓があり、上石は径二メートル程度、厚さ五〇センチをはかるものがある。

北部九州の弥生時代の墓地は通常集落内の全住民が埋葬され



写真2―22 志登支石墓群

なる墓地が調査され、多紐細文鏡たちゅうさいもんきやう・細形銅鏡・細形銅矛・細形銅戈など、朝鮮半島からもたらされた青銅器が出土した。また、福岡市吉武高木遺跡では一〇〇〇基を超す甕棺墓からなる共同墓地とは離れた場所で、一辺が約三三メートルの正方形に近い形の墳丘墓が発掘され、木棺墓四基・甕棺墓一六基の成人棺と小児用甕棺一八基の埋葬施設と多紐細文鏡・銅剣・銅矛・銅戈や玉類などの副葬品が発見されている。

このように福岡平野から唐津平野では、個々の地域内の農業共同体内で富の集中がいち早く進み、朝鮮半島との交易を通じ

る共同墓地の形をとる。その埋葬施設は石棺・木棺・土壙などの他に、甕棺が高い割合で採用されている点に特徴がある。こうした集団墓地とは別に前期末から中期初頭になると一般の集団とは区別された特定の有力者の墓地が形成され始める。唐津平野の宇木汲田遺跡では前期末から中期中葉の二一九基の甕棺墓から

て貴重な青銅器を占有していたことが分かる。その時期は前期末から中期初頭にさかのぼり、それらの富を蓄積した特定集団がそれぞれの地域を統括していたのである。

中期以降の特定集団の墓地は、列島内の弥生時代の墓地の中で副葬品の質・量ともにもっとも豪華になる。伊都国が栄えた糸島平野では前原市三雲南小路の一号甕棺墓からは銅鏡二六面以上と劍・矛・戈などの武器形青銅器四本の他にガラス製の璧・玉類が出土している。奴国の中心地である春日市須玖岡本一帯は数万基を数える甕棺墓が存在するが、D地点の支石墓下の甕棺からも前漢鏡三〇面・武器形青銅器一〇本とともにガラス璧が一点出土している。璧は中央に孔を開けた円板状の製品で、中国の殷代から漢代では諸侯の身分を示す標識となっていた。更に東方に行くと、不弥国に比定される飯塚市の立岩堀田遺跡では特定集団の墓地で四三基の甕棺墓が調査され、10号甕棺から前漢鏡六面・銅矛一本・鉄劍一本が発見されている（写真2—23）。

中期以降顕著になる特定集団の墓地は、後期初頭には王墓と考えられる特定個人墓へと変化する。末盧国が所在した唐津市桜馬場遺跡の甕棺墓からは後漢の方格規矩鏡二面・巴形銅器三点・銅劍二六点が出土している。伊都国では前原市井原鍵溝遺跡の甕棺墓でも方格規矩鏡二二面・巴形銅器三点などの副葬品が発見され、平原遺跡の方形周溝墓からは中国鏡三七面

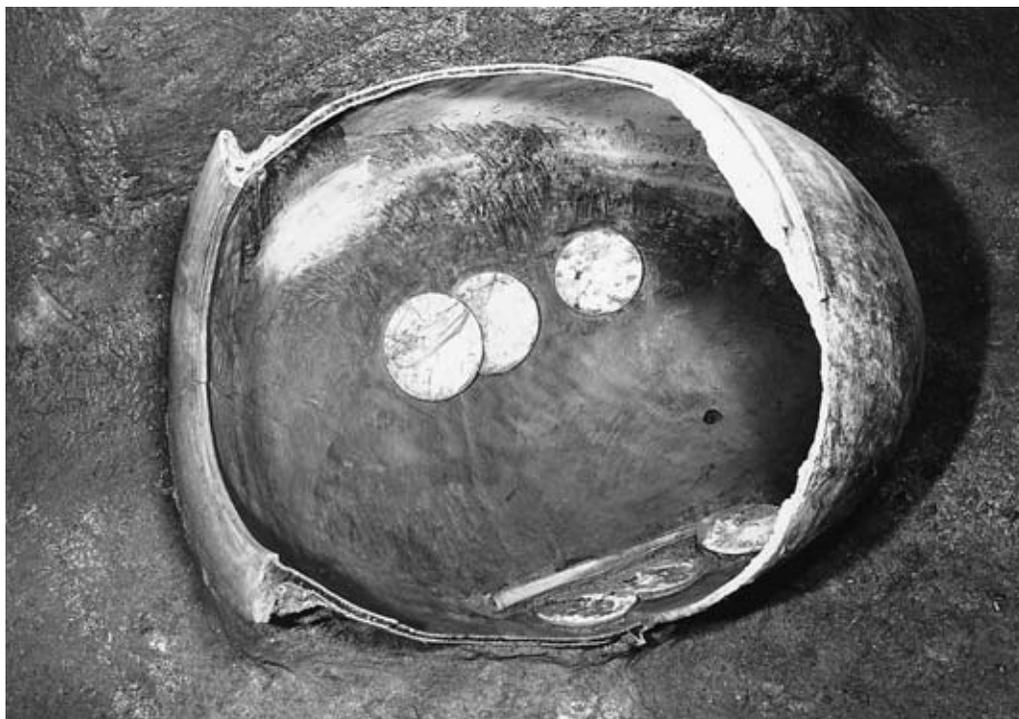


写真2—23 立岩遺跡10号甕棺墓（飯塚市教育委員会所蔵）

と、弥生時代では日本最大の直径四六・五^錢をはかる仿製内行花文鏡五面が出土している。

このように弥生時代を通じて特定集団から特定個人へと富と権力の集中が進んでいき、後期にみられる特定個人墓が次の古墳時代には前方後円墳を代表とする古墳の築造へと進展していくのである。

道具の生産 弥生時代には石器や金属製品などの各種の道具と**流通**を専門的に生産する集団が現れる。石器の場合

それは石材の産出地に所在することが多い。飯塚市立岩周辺の堀田・焼ノ正・下ノ方などの遺跡では、西方の笠置(木)山などで産出する赤紫色の輝緑凝灰岩や頁岩を素材として、石庖丁や石剣・石鏃などを製作している。これらの石器生産が不弥国に繁栄をもたらしたのである。福岡市西区今山遺跡では黒色の玄武岩を原材料として、長さ二〇^錢、幅八^錢、厚さ六^錢前後の大型の太形蛤刃石斧を製作している。更に、北九州市八幡西区の金剛山西麓に所在する原・馬場山・辻田西・門田などの諸遺跡では、灰色の硬質砂岩・粘板岩で石庖丁・扁平片刃石斧・石鏃・石戈などを生産している。これらの各地で生産された石器は福岡県内を中心に佐賀県東部や熊本県北部の地域まで供給されている(図2—69)。金属製品では春日市周辺で鑄型が集中して発見されており、青銅器が盛んに生産されていたことがわかっている。岡本町四丁目遺跡や大南遺跡では小銅鐸の鑄型

が、大谷遺跡では銅鐸・銅矛・銅劍・銅戈の鑄型が八点発見されている。須玖永田遺跡では小型仿製鏡、赤井手遺跡でも銅矛・銅戈などの鑄型九点とともにガラス勾玉の鑄型も出土している。

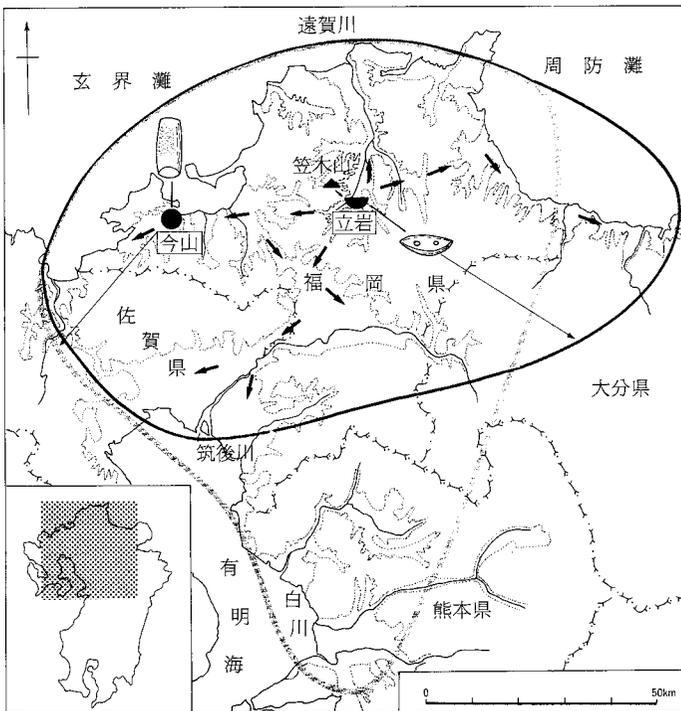


図2—69 立岩産石庖丁と今山産石斧の流通